

## 生きる力をつける授業づくり

堤吉郎（愛知・扶桑東小学校） 1994.10.30

### I.理想は高いが、授業は失敗の連続

### II.授業の背景

- 1.自分史の中の「みんなが」の思想（f o r a l l）
- 2.算数から学んだ「系統性」の威力
- 3.綴り方から学んだ  
「みんなをつなぐ」ということ

### III.体育同志会との出会い

- 1.1977年長野大会で
- 2.追試するだけの授業から、課題を設定する授業へ

### IV.教材と教科内容の区別

- 1.「文化に内在している価値」と「教材としての教育的価値」
- 2.他教科に学ぶ

### V.こんな子どもたちとこんな授業を

- 1.みんなで考える1年生
- 2.自分たちで活動できる6年生

### VI.我々が、やっていくこと

- 1.教科内容研究

## 生きる力をつける授業づくり

堤吉郎（愛知・扶桑東小学校） 1994.10.30

### I.理想は高いが、授業は失敗の連続

一昨年、出原先生が和歌山大学の方へ転勤されました。それまで出原先生を入れて常任委員会9名だったんですが、近藤ひづる先生が戻って来ましたので、また常任委員会9名でみんなで総力上げてやっています。たまたま報告のタイトルはこうなっただけで、特に私の力でこういったことができたわけではありません。毎年いろいろな実践を積み上げているという紹介がありましたが、それほどうまくいっているわけではなくて、みなさんと同じように毎日悩みながら授業をやっています。

今度の表題にある話にきちんと結び付くのかどうか、少し心配なんですけど、自分の体育同志会と共に歩んできたところをお話しして、そして、教科内容研究になぜたどりついて、今どんなことをしているのかというところまでいけたらいいなと思います。

逆に言うと、今、知多大会の後、教科内容研究ということで、1年間子どもとか授業とか実践とかいうことを一切脇において、ひたすらプロジェクト研を中心にしながら教科内容研究をしてきたんですが、そのことで授業作り、実践などがおろそかになって1年間悩み苦しんでいるところです。そのあたりのことは、12月に来られる榊原先生から5月の中間研究集会で皮肉っぽく指摘されたところです。「そのうち愛知から教科内容研究を踏まえた実践が出てくるからそれを見ればいい」という言い方をされたんですが、そのこと

ころはなかなか作り出せずに、まだの状況です。昨日の皆さんのレポートや討議を聞きながらいくつかのヒントを頂きましたので、そういったことをもとにしながらまた授業作りに励んでいきたいと思っています。

「生きる力」ということなのですが、それをどうとらえたらいいかということとは、なかなか難しいのですが、一言で言うと自分の目の前にいる子どもたちを励ますということ、どうやったら子どもたちがその気になってやってくれるかなということを考えて授業をやっていくことになります。子どもを励ますということは、言葉が短すぎて誤解をされるかもしれないけれども、今のめあて学習でも「関心・意欲・態度」ということで、「がんばれ、がんばれ」とやるわけですが、体育同志会が言ってきた「生きる」ということは、「できる」「わかる」「生きる」というふうに3つ並べられているように、「できる」とか「わかる」ということを保障するというか、「できる」「わかる」を通して子どもに「生きる」力をつけよう、励ましていこうということだと思います。

## II. 授業の背景

### 1. 自分史の中の「みんなが」の思想 (for all)

#### (1) 子どもが集中しないのは教師の責任

私が教員になった時、最初に行った学校が若い先生が多くいて、いろんな民間の研究団体にみんな出かけていく、たまたまそういう学校に赴任したということがひとつあります。みなさんご存じのように愛知は管理主義と言われるように、教員も子どもも一つの体制で管理されている側面がかなり強いのですが、そういう中になって、比較的割りとき自由にものを考えたり言ったりする仲間のいる学校に赴任しました。

#### (2) みんなに楽しいと言わせる授業

当初自分が考えていたのは、「授業が楽しいな、面白いな」と子どもが言えるような授業をしたいという思いがありました。子どもが外を眺めたり、ざわざわしたり、おしゃべりしたり、何かごそごそしたりする時には、こっちの授業のやり方が悪いんだというふうに思って、なんとか自分の授業の魅力で子どもをこちらに引き付けようという事が頭の中にありました。でも、そうは思うのですが、なかなかうまくいかなくて、やっぱり怒鳴ってしまったり、こちらの準備不足などでも子どもを叱ったりすることがありました。

当初先生になった時、自分は運動ができますので体育の時間というのは、それほど困らないわけです。器械運動をやっていたので、マットとか跳び箱とか鉄棒とか自分ができますからやって見せて、コツみたいなものを教え、補助したりして、子どもたちを手伝ってやれば、やればだいたいできていくようになります。ゲームなんかも子どもの中に交じって一緒に遊んでいるとだんだんうまくなっていきました。それで体育の授業には、支障は何もないと考えていました。

#### (3) 困ったのは国語と算数

それよりも困ったのは国語とか算数です。低学年の国語の本とか社会の本とか絵ばっかりいっぱいあります。読んでしまうと1冊すぐ読んでしまうようなその本で一体何を教えるんだろうか。算数なんかでも自分にとっては、わかりきったことですね。5 + 2 = 7に

しかならないというふうに思っていました。そのことでどうして1時間も授業ができるだろうというふうに考えて、最初に勉強し始めたのは国語とか算数でした。

## 2.算数から学んだ「系統性」の威力

### (1)「源」のところがわかったら後は、水を流すようにわかっていく

最初は算数のサークルに出かけて行きました。当時まだ遠山啓さんが生きておられて、盛んにいろんなところで講演をされたり、サークル活動も活発にされていました。そのとき、数教協に通いまして、算数のいろんな勉強をしました。みなさんもお存じだと思いますが、水道方式という計算体系を遠山さんを中心にしながら現場の先生たちが作り上げていくわけですが、一番もとのところをきちっと教えてやると、あとは、水源地から水を流すように特殊な形を順番に教えて行くとそれができるようになっていく。そのことを学んで、子どもたちにそのように教えて行くと、かなりの率で子どもたちができるようになっていきます。そのときに、系統性、教える順序性というのが大事なことを学びました。

そのころは、体育同志会に出会っていませんでしたが、後で体育同志会に出会ったときに、ドル平や側転の指導法を知りました。側転では、動物歩きから川とびをして、そして180度ひねりを加えて行くという道筋をたどって行くと、ほとんどの子どもたちが側転ができるようになっていきます。これも系統とか教える順序性だとかスモールステップとかいうことの威力だと思います。後から知ったことですが、「ドル平」というのも、当初作った人達が、水泳でいうと算数の水源地、あるいは素過程というものは何になるんだろうということを考えられたそうです。その一番もとに、子どもがつかずいているそのことだけクリアすれば、泳げるようになるようになると思ったのが「呼吸」だということです。みなさんお存じのようにその呼吸を大事に、そのところをクリアさせるような指導法として「ドル平」が生まれて来たその後から聞きました。

### (2)「数」や「量」は人間の生活と密接につながっていた

#### 1) ~意味が「わかる」とおもしろい~

算数の中では、そのことと一見抽象的な数とか教えている難しい公式とかその一番背景には量というものがあります。その量というのは私たち生活の身近なところにあって、しかもすごく難しい数学もずっともとをたどって行くと、前の人たちの工夫がそのなかに込められていて、そういうのに勉強していく中で出会ってきました。

例えば、1対1対応ということを小学校1年生のときに最初に数を教えるときに教えるんですけど、私が小学校の先生に初めてなったときの算数の教科書は、1対1対応で教えるのではなくて、太鼓をたたいている先生の絵があって「1、2、3・・・」と数えるところがあって、10まで数えるんですね。それで、1、2、3という数字を練習する。よく数え主義というふうに、そのとき数教協の人が批判されたことなんですけども、それで教えるようになっていました。それで教えていくと、10というのも一つの記号として覚えるため、次に11という数字を子どもたちが、「101」と書いて、これで11というふうに位取り記数法がうまく教えられないという弊害を生むことになって来ました。

1対1対応ということを、その当時の数教協の人達が主張し実践し広めていく中で教科書会社の方が変わっていくということが起きてくるんです。愛知県は今でも全部啓林館な

んですが、その当時も啓林館とう教科書を使っていました。日本でも採択部数の最高の出版会社だったんですが、数教協のいろんな批判があって東京書籍に追い抜かれてしまうんです。その後、いろんな教科書会社もそうですが、啓林館もやっぱり民間のいろんな成果を取り入れざるをえないわけなんです。そうすると教科書の方が変わってくる。教科書が変わってくることで指導要領の中味も1対1対応を取り入れざるをえないということが生まれてくるわけです。

先程の側転なんかもそうなんですが、そのときにもう体育同志会では、側転の系統だとか連続技だとかいうことをすでにやっていたわけなんです。後のもう一つ前の指導要領の中に連続技という言葉が入ってくるのが起きているわけです。指導要領は、指導要領というものがあって、現場に下ろされて現場に押し付けられているわけではなくて、実は、僕たちが日々作っている実践の中で成果のあったものは、その中に入れざるを得ないのです。だから、僕たちが指導要領を作っている、変えているというふうに考えてもいいんじゃないかと思えます。

## 2) ～抽象の向こうに「人間」が見える～

1対1対応という方法は、数がないときにどうやって数を数えたかという話になります。昔羊飼いたちは、羊の数だけ石を持っていて羊が帰って来たら石を一つずつ置いていきます。それで石が余れば、まだ戻っていない羊がいるということで、羊を探しにいくでかけるというふうに数えるんですね。抽象的なものの背景にはそんな人間の営みというか暮らしがあって、そういうことを教えていく面白さを感じていました。カンドールという数学者いるんですが、1体1対応という方法を使って、無限集合という直線の中に点がいくつあるかとか、数の集合と直線の中の点の集合はどっちが大きいかというのを19世紀末考え出したんですね。過去のすごく素朴な方法がまだ現代数学の中に取り入れられています。で、また新しい発見があるということもそのとき学びました。

他の算数の例でいうと、「九九」と「1あたりの量」の関係などもタイルに引き寄せて考えてみると面白いなと思うんです。「九九」を習ったときは、唱えるだけでした。そこには「1あたりの量」といった考えはないんですが、今は数協教の成果で「1あたりの量」をもとにして教えるように教科書も変わってきています。2年生で「九九」をやるんですけど、習熟が先行するんです。先に「九九」を覚えてしまう。そして5年生になったときに「1あたりの量」としてあらためて「九九」の意味みたいなことを授業でやるんです。「1あたりの量」をやっていくのに「九九」の暗記主義というか、「1あたりの量」をもとにしないで「九九」を覚えておいて、5年生で「1あたりの量」をやるとなかなかわからないです。その「1あたりの量」というのは、「車1台当たり輪が4つあります。4台では車の輪はいくつになるでしょう」という教え方をするんです。「1あたりの量」が大事だと気づいたときに、今度2年生の「九九」を「1あたりの量」で先生たちは、教えることになるんですね。そのことがまた5年生の「単位あたり」の量の単元にくるとそのことがまた前より一層生きてくることになって、「習熟」と「わかる」という関係を考えるヒントがあるんじゃないかと思えます。習熟が先行したり、わかったり、わかってまたできるようになったりということが、その中にも見られるんじゃないかと思えます。

昨日の話の中で「教室でやる体育」の時だったと思いますが、教えていることの背景に

先人の努力とか工夫とかを学ばせていくことや、人間ぽいというか人間らしさがあると、子どもたちが親しみをもって、覚えてくれると思います。人間の素晴らしさみたいなことを一緒に教えていくことを算数では学んだような気がします。

昨日の話の続きで言うと、「教室でやる体育」というのは、スポーツの楽しさや素晴らしさを教えたいがためにやっている側面があると思います。夏のときに少し話題なりましたが、これまでどちらかというと「教室でやる体育」というのは、告発型の授業になりやすかった。ゴルフを取り上げると、それは環境破壊の問題であったり、公害の問題につながったり、それはそれとして重要なんですが、スポーツそのものの素晴らしさを教える授業があってもいいんじゃないかということが言われているように思います。

鉄棒や跳び箱やマットなんかそうなんですけど、鉄棒が抽象的な鉄の棒になったときにできる技がものすごく増えるんです。前に、中村敏雄先生と話をしているとき、「技が発展すると同時に鉄の冷たい棒になるということで、失ったものは何か」というふうに聞かれたことがあります。かつては柵だとか木登りの木だとかつるつるした横木だとかそういったものを使って子どもたちは遊びながらやっていた楽しさというか、また人間性を一方ではなくして、抽象的なものだけが全面に出て来たと思います。そこにあった人間の面白さみたいなのが削ぎ落とされていって、そして技のほうだけが拡大したんです。柵の横木だとか木の枝では大車輪ができないですね。ところが鉄の棒になることで、あそこでぐるぐる回ったり宙返りを3回もして降りたりというふうに見えるように空間とか技とかそういういったものの表現を拡大することができたんですけども、それと同時に何か人間性みたいなものを失ってきていっているんじゃないかと、そういうのを発展というふうに考えていいのかわかると言われたことがあります。

だから、今ある成果だけを伝えていくというか、何かを教えようとするときに、どうしても教え込みになりやすいと思います。そのために一つは教科内容研究の中で、私たちが歴史を調べていったのは一つにはそういう意味もあったかなと思います。そもそも、昔の人はどう考えたのか。そもそも、これっていうのは、どうやって生まれてきたのかそういった所をたどって、教える側がもつということが非常に大事なんじゃないかと思います。

### (3) 系統性を知っていることの欠点と利点

同志会でも「系統性の一人歩き」がよく言われました。ある体系ができあがったしまうと、それを子どもたちに教えていくと、かなりの子どもたちができていってしまうので、それにのっかり始めて、それだけやっている授業に陥ってしまうと思うんです。そこからなかなか体育同志会も抜け出れないでいたんじゃないかと思います。昨日も少し夜遅く話しましたが、50m走をやると田植えをやらなければいけないみたいなことがあったりとか、マットの授業を見てみると系統をたどって側転を教えることが先行したりとかがあり、そこからなかなか抜け出れないことがあると思います。

それは数教協の人たちも系統の一人歩き、作られた水道方式の一人歩きということ言われていて、質の高い数学を子どもたちにわかるように取り組んできました。「できる、わかる」とか「わかる算数」とか言われていたんですけど、それから一歩進んで、わかっていても子どもが苦痛で授業を受けているようじゃいけないからということで、「楽しい算数」というふうに路線が変わってきます。それはちょうど仮説実験授業が出てきた

ときなんですけども、算数でいうとゲームで授業していくということが出てきたときにやっぱり子どもたちが楽しみながらわかっていくという、そして楽しいということの中に先程言ったすごく人間的な人間の数学というのをその後の大会でスローガンに掲げたりしていました。そういうような視点が他の教科でも出てきた時だと思います。

体育同志会でも系統の一人歩きということが、なかなか克服できなかったときがあったのではないのかと思います。

10月に愛知支部では、タッチフットボールの例会をやったんですけど、そこでもやっぱり同じような議論がされていて、タッチフットボールをやるときにいろんなプレーのパターンがありますが、それをどんなふうに教えていくのか議論をしているときに、「典型的なパターンを教えるから子どもたちがそれ以上の発想をしなくなる」というふうな発言がありました。そういうことを教えようという意図があまり全面的に教師のほうに出てくるから子どものいろいろな発想を制限してしまうじゃないかというふうな考えが一方では出てきて、「いやそうじゃないんだ。そのパターンをいっぱいもったり系統ということを経験がもっているからぐるぐると子どもはいまわらすことに陥らずに、見通しをもって授業を進めることができるんだ。やっぱり系統だとかパターンというのは教師が持っているべきで、そのことによって、授業に見通しを立てることができて、なおかつ教師の予想以上のアイデアとか考えとかゲームの展開だとか授業作りだとかいうことの子どもの発想が出てくるのが普通なんだ」と議論をしたことがあります。系統性というものは必要なんだろうと思いますけれども、それが全面に出過ぎるとどうしてもそこからはみ出た子どもたちを見落としてしまうことに陥ってしまいうんだと思います。

### 3. 綴り方から学んだ

「みんなをつなぐ」ということ

#### (1) どの文章も捨てられない

次に国語の勉強をしていたときのことで、大阪の綴り方の会の野川先生のことなんですけど、今は退職されていますが、当時は小学校の先生で教組の活動を榊原先生とされていました。私も大阪の綴り方の会に何度か参加しました。実に暖かい先生で、子どもの書いてきたものを無条件で受け入れて、それを子どもに返していきながら、教室にいる子どもたちを順番に気持ちをつないでいくことを見事にやっている人です。

授業を何度か見せてもらうんですけども、たいした授業は全然していません。例えば、詩を読むとか物語文の一部を読むとかいう授業は、「何か、お話をして下さい」というだけなんです。詩の一文があるとすると、それを子たちにずっと読ませて、手が挙がらなくなるまで何度も何度も読ませて、「何か、お話をして下さい」と言うだけなんです。それで、子どもたちが何か気づいたことがあるとか3人ぐらい手を挙げたりすると、その3人の子どもたちが発言をして、「もう話はありません」と言うと、「誰か読んで下さい」と、これを繰り返しているだけで、全然たいしたことはないのです。

これなら僕にもできると思って学校に帰ってやるんですが、「お話をして下さい」と言っても誰も意見を言ってくれなかったりということがありました。そこには何か積み上げがあるんだろうなと思って、何度か通ってみてたんですが、日々作文を書かせたりするの

は、強制するわけでもなく、「誰か書いてきてくれませんか」という形で問いかけて、作文を書いてきてくれる子どもがいるわけなんです。それをみんなの前で読むことで、書いてきたことをものすごく大事にされるんですね。それで子どもと子どもの気持ちや心をつないでいく。そんなことを綴り方の中で学んできました。

私がそれを知る前の作文の授業なんてのはひどいもので、あるテーマを与えて、「書いてきなさい」というと持ってくるんですね。半分しか書いていなかったら、「これだめとか書き直し」とか、「書いていることがよくわからないから、書き直し」とか言っていました。詩なんかでも、書いてきても、書いてきても「これだめ」というふうに突き返していくというとても乱暴な指導をしていました。

野川先生は、一番最初に書いてきたものは、これが子どものスタートだからということで、そこから出発するんですね。原則として作文は書き直しはさせないんですね。それを読んで、みんなでお話しを膨らませていって、それはそれでおしまいなんですね。次に書くときに、そのときに話し合ったことが、少しでも生きてきたりというふうな1年間経ったら子どもが少し変化しているぐらいの気持ちで取り組んでいるんですね。それを性急にというか、この1時間の授業で立派な作文を書かせてしまいたいという思いが当初ものすごく強くて、そのことを作文の会から徐々に学んできました。

## (2) みんなの中で「認める」ということ

もう一つ学んだことは、ほめるということです。子どもがまたやってみたいとほめるんですが、おおげさにほめたり叱り飛ばしたりということでもなくて、その中間みたいな「認める」と野川先生は言っています。書いてきたものをちょっと認めてやるとか、ちょっと声をかけるとか、「いいな」と言ってやるとかをしきりにやるんですね。おおげさでなく、さりげなく認めてやるというのが、子どもを励ますというふうに言われました。

あるとき授業を見せていただいたときに、「昨日、うちでしゃぼんだまをしました」と文章がこれだけななです。もう少し先生は書き足したくなったりするんですね。しかし、それを2、3回みんなの前で繰り返し読んで、あとはしゃぼんだまの話をいっぱいさせるんですね。「昨日しゃぼんだまを作ったの、そう」他の子どもたちにも「誰と作った」とか言ってみんなが質問するんですが、それをやりながら「どうやって作った」という話になって、「明日、みんな石鹸をもってきて、しゃぼんだま大会をしようか」という話になるんです。

それを朝の会とか国語の授業の冒頭にやるんですね。そうすると、それを先生のところに作文を書いたと意気込んでもってきた子どもは、僕の作文が取り上げられて、そしてみんなの話題になって、明日はしゃぼんだま大会になったということで、また書いてみようという気持ちになるんですね。そういうことを気長に繰り返しているんですね。あるとき、先生を教育研究集会の作文の会で名古屋に呼んで、お話を聞いたことがあるんですが、「それでも先生、いろんな働きかけをするんですが、にもかかわらずちっとも書いてくれなかったり子がいるんじゃないですか」と質問したんですが、「それはいます。それはしゃあない」って言うんですね。だから救われた気がしたんです。ひとりできないともうだめだと、すごく意気込んでいました。いろんな教科でできない子がひとりでも残してしまったらもうだめだということが頭にあったんですが、「それは、しゃあない。次の先生にお願い

いするよりほかありまへんな」というふうに言われて、ほっと楽になった気持ちがしました。1単元でというより、自分が担任している1年というスパンでものを考える。それでもできなかつたら2年で。担任してできなかつたら、次の3年生に送る。そのときに学校全体のカリキュラムで、学校全体でどういう子どもを育てるとか、卒業するまではどんな力をつけるんだという計画、学校全体のつながりとか、教師集団の働きかけが問題になってくると思います。

### Ⅲ. 体育同志会との出会い

#### 1. 1977年長野大会で

##### (1) 田楽座の「そうらん節」

私は大学の体育科を卒業していたので、体育の先生だったんですが、就職して同時に体育主任というのを任されました。新任のときから体育主任だったんですが、体育は、適当にやっていたら子どもは喜ぶし、体育の先生というのは、指令台に上がって大きな声を張り上げたり号令を出したりというイメージがあって、自分自身体育教師であることにあまり誇りが持てないことがありました。

あるとき、「子どもと教師」という雑誌を開いて、夏休みの各サークルの一覧表を見たときに、「学校体育同志会」があまり遠くない長野であることを知りました。体育にも民間の教育団体があることが、驚きでした。それで初めて参加したのが1977年の長野大会です。このときは、ダンスの分科会に行きました。なぜダンスの分科会に行ったかというところ、ダンスの授業を1時間もやったことがなくて、そのうち誰かにダンスの授業はどうするんだと聞かれたときに、困るんじゃないかと思ったからです。自分でもダンスの授業はやったことがないし、他の先生はどうやってるんだと思って参加したのがダンス分科会です。そのときは創作ダンスをやっていて、シンメトリーとかよく理解できませんでしたけど、そのとき同志会の恒例の交流会が3日目がありました。そのときは、キャンプファイアでした。外の焚き火を囲んで長野の田楽座という一座が、「そうらん節」を踊ってくれたんです。それを見て、すごいなと思いました。大会が終わるときに、次の年は、秋田県のわらび座を会場に体育同志会の夏大会をやるという案内がありました。これには絶対参加したいなと思ったのが最初でした。そのときの夜、来ていたのが高瀬潔、中瀬真佐夫、成瀬徹という愛知支部を準備して来た先生たちだったんです。そこで出会って初めて体育同志会に入ることを決めました。それまで、算数や作文に勉強しに行っていたんですが、会員になったことは一度もなかったんです。なぜかそのときは体育同志会に入ってしまった。

次の年、秋田のわらび座に行って、御神楽を教えてもらいました。3日間御神楽を教えてもらいましたがものになりませんでした。それは、ずっと後になってから自分のものになってきたんですが、なかなか覚えられませんでした。それよりも昼休みにわらび座の座員の人をつかまえて、「そうらん節をどうやるの、こうやるの」と聞いて、昼休みにそうらん節を覚えて帰ったんです。運動会でそうらん節をやりたくてそれが最初のことだったんです。

##### (2) 経験主義的な体育ができなくなった



次の年、78年に愛知支部が結成になりました。その準備を先程言いました成瀬さんたちがされ、78年の愛知支部の結成のときから、たまたま参加できるということになりました。最初例会に集まってくるのは、だいたい4人です。高瀬さん、中瀬さん、成瀬さん、僕。会員は15名ぐらいいまして、結成のとき名前だけは30名弱ありました。実際に例会に出てくるのは4人。ただ成瀬さんが一人で支部ニュースを作る。成瀬さんが実行委員会を招集して、でも集まるのは4人だけですが、そして月に1回例会をやる。これだけは、支部のバロメーターだからくずさないようにということで、細々とやってきました。

その当時、側転の威力とかラグハンドという新しい今まで知らなかったゲームを知ったことでうれしくてしょうがなく、それをそのまま物まねで教えてもらった通りに子どもたちに教え込むという授業をやっていました。それで今までですと、先生が中心になって見本を見せてやる。子どもを補助してやらせるとか、サッカーなんかでいうと、私も交じってゲームなんかに参加しながら声を張り上げながら、「こっちに動け。あっちに動け」と言いながら20時間も30時間もサッカーをやる。そのうち子どももうまくなるというような経験主義的な教え方をやっていたんです。これだけでも子どもは喜ぶし、うまくなっていくんですが、同志会のいろんな実践を目の当たりにするにつれて、自分の授業はだんだんできなくなってくる。経験主義的な、こんなの恥ずかしいなと思うようになってきて、かといって同志会のいろんな実践を全て自分が身につけているわけではないし、とりあえず民舞のそうらん節ができるかとか、側転の系統性を知ったとかラグハンドのやり方がわかるというこの程度ですから、もう他の授業がだんだんできなくなってくる。一時期、落ち込むという感じでした。片っ端から同志会の本を読んでみたりしても明日の授業に間に合わないわけです。

## 2. 追試するだけの授業から、課題を設定する授業へ

### (1) 出原先生との出会い

結成のすぐ後に大阪から出原先生が愛知にやってきます。それで相談したところ、「すべてをすぐに吸収してやるのは無理だから、やっぱり過去がどうだったのか先行実践の本をいくつか読んで、たどっていくことが大事なんじゃないか」と言われました。また今、各支部で活躍している人達は、例えば、サッカーで一生懸命やっている人は、過去10年間体育同志会がどんなふうに進んできたのかやっているはずだから、同じように何か一つ自分でターゲットをしぼってそのことを必死でやったらどうかとアドバイスを受けました。そこで、また少しずつ勉強していこうということになりました。

10年最初の学校にいたんですけど、1つ目の学校の終わりから1年か2年前の時に、8年目か9年目の時に、出原先生が愛知に見えたので、少し同志会の全国的な情勢や出原先生の50mの実践とかを教えていただいて、そして次の学校の山名小学校に行くことになります。それから、少しは同志会から学んだ実践ができるようになってきたかなと思います。それを「追試するだけの授業から課題を設定する授業へ」と書いています。

### (2) 「わかる」「考える」を大事にした体育

この時に1982年に山名小学校に赴任したんですけども、6年生の担任をしてここで初めて出原先生の指導を受けて50m走をやりました。この山名小学校は、生活面では管理

主義的なところを多く残していますけれど、授業では、かなり自由なところをやるというか、誰も文句を言わないというところがありましたので、実践的なものは自由にやれました。そのことが実践を可能にしたかなと思うのです。

入った年にサッカーゴールをもう1つ買ってもらい、2面にして、次の年はハンドボールのゴールを買ってもらって、バスケットゴールも1面しかなかったのを授業がやりにくいのもう一面買ってもらうとか、どんどん増やして行って施設面でもいろいろな条件を整えながらやりました。この時には、「考える」体育とか「わかる」を大事にした体育ということをしごく意識していきまして、法則化の体育のように指示で次々と行動する体育というのではなくて、何か発問をして、そのことをみんなで考えたり、答えを出したりすること意識しました。50m走も例えば「50mをあなたは何歩で走りますか」という問いかけがあって、じゃ運動場に出てやってみようというようにしてやったりしたんです。

### (3) みんながみんな

この時に、「みんながみんな」 という考え方で授業をしていくようになって、その後、出原先生の「みんながうまくなる」授業というのができていくわけです。

その下に書いた「系統を隠す」とか「隠した系統を探させて」というのが、さっきの「系統の一人歩き」が前面になることで先生の教え込みみたいにならないようにと出原先生が言っていたことです。究極的には自分たちで計画し、自分たちでオリエンテーションし、自分たちで運営し、自分たちで総括するという力を子どもたちにつけてやるというふうに中村先生や、その他の支部でいろんな話をしてもらいました。

### (4) オリエンテーション再考

当時、オリエンテーションがどうも手続きになっているのではないかと、ただ手続きをしているだけで、1時間目教室でやって2時間目から外でやっていないかと問われていました。オリエンテーションの本当の意味は計画を作ることにあります。もし、教師が作った計画ならばそれは、子どもに返してやって子どもに「これでいいですか」とたずねて、子どもに異議があれば子どもの異議と先生が対決をし計画を進めていかななくてははいけません。だから、かつてはオリエンテーションは先生が「これでいいか」と言って子どもが、「いやだ」と言えば、それだけでもう3時間も4時間も話し合いが決着つかず、オリエンテーションを何時間もやったことがあるんです。最近は、たった1時間でスマートにチーム分けをして、「はいこれで終わります。めあてはこれです」と流れてしまっているのではないかとその時に言われました。

低学年で、自分たちで計画というのはむづかしいけれど先生の立てる計画になんらかの形で子どもが参加するというのがやっぱり大事なのではないかと思います。最終的には、子どもたちにまかせきれる授業ができるといいなと思います。

### (5) 「できる」「わかる」「生きる」

その時期に「できる」「わかる」「生きる」ということがでてきて、体育同志会だけでなく他の教科の先生方とも「生きる力」が弱くなってきているのではないかと感じていました。学校で教えていることがどうも子どもとかけはなれているのではないかと、あるいは、

受験のための知識に中学校や高校は片寄っていてどうも子どもの実生活とか、必要とかとかけはなれているのではないと言われていました。子どもの「生きる力」を励ますとか、子どもの生き方と教えている授業を切り結ぶということが当時話題になってきます。

「できる」「わかる」「生きる」というように「生きる」を並べる時に、「生きる」というのは個別なことで、個性的なことだからどういう価値を子どもたちのどういう「生きる」を先生は肯定するのか、どういう生き方を先生は選択するのか、教師の側は何を励ますのか等が問題になってくるわけです。そのことは、一つ間違うと個別化・個性化という文部省の言っていることと変わらなくなってしまう。一人一人を大事にするという名のもとに指導しないで子どもを放任してしまうところにつながりやすいと思います。そこで、どういう価値を形成するのかということを教師側がきちんと持たないとだめだし、それを自分一人の思い込みではいけないので教師も集団で取り組むということで、学校をゆさぶる中で討議してもらうこと、あるいは職員会議とか職員の集団の中で討議してもらうこと。それから子どもで言えば、子どもがグループの中でそれぞれ意見を闘わせるというか、価値をぶつけ合う中で「〇〇ちゃんの考えていることはどうもちがうんじゃないか」とか「●●ちゃんの考えていることはすごい。みんなも一緒に考えていこう」ということになるんじゃないかと思います。その時にやっぱり自分一人ではなくて、「集団で」というのが必要になってくるのではないかと思います。

今、熊本が「グループ学習」を中心に行っているというのは実践をやっていくうえで両輪みたいなもので、教えていく中身と教えていく中身をどんなふうに子どもたちの間に合流させていくか、どんなふうなグループ学習が望ましい姿なのかというようなことがこれからの問題となるのではないかと思います。

#### IV.教材と教科内容の区別

##### 1.「文化に内在している価値」と「教材としての教育的価値」

###### (1)愛知の教科内容研究

下に「こんな子どもたちとこんな授業を」と書きましたけど、この時までの実践です。その後、教科内容研究で、1年間全く文献研究に没頭しました。1年間例会のタイトルも「跳び箱の歴史」とか「跳び箱の技術構造」とか「跳び箱の・・・」とむつかしいタイトルでやってきましたから、「ひょっとしたら会員はどんどん減っていくんじゃないか」とも考えました。それでも「1年間やりきろう」というふうに出原先生は、激を飛ばして、そのまま自分は和歌山に行ってしまいました。1年間、とにかくそのことだけをやり切ってきて、教科内容研究のおもしろさというのが、一緒に文献を探したり、近くの大学に行くと、本のそろっているところに行くと、体育科教育の「跳び箱」と名のついているところを全部コピーして持って帰ってくるんです。そうするととてつもない厚さなんです。それを9人で分けて読んで「一人は、全部目を通さないといけない」と出原先生は言って、最初のころはめくって読んでいましたけれど、書いてあることが似たようなことが書いてあるので、「もう、おもしろくないなあ」と言いながら読んでいました。そんなことをしながら、「何が、わかったか」ということをやってきました。その体験で調べた人達には、自覚促すというかそんなものがでてきたように思います。

## (2)文化に内在している価値と教材としての（教育的）価値

その時に中村先生が言われたのは、「文化に内在している価値、文化がもともと持っている価値が、そのままストレートに授業に得られるわけではない。文化の持っている価値というのはいくつもあるから、教育的価値をといるのを認めて、その中の何を教材化するのか。あるいは、本来文化に内在していない価値でも授業にかけているか。教材としてどう使うのか」というようなことを話されて、「文化的価値と教育的価値とどこがどう違うんだ」ということを悶々としてやっていました。けれども、中村先生からは、それに対して解答がいただけませんでした。「自分たちで考えろ」ということなんですけれども。スポーツとか運動文化とかは素材であって、その中にいろんな価値があって、その価値を子どもたちがわかるように教材化していく。そんなことを一生懸命やっていました。

## 2.他教科に学ぶ

### (1)鈴木美子先生の「ごんぎつね」

知多大会の時に、教材を作っていくときに教科内容研究みたいなことを他の教科ではどうしているかを取り上げましたけど、今年、大阪支部が、学習会で国語の先生を呼んできて国語の教科内容はどんなことかと学習会をやり始めました。

知多大会では、日本作文の会の教科研究の国語部会に所属していらっしゃる鈴木美子先生に来ていただきました。この人は、今はもう退職されていますけど、作文集などで、作文の会が表彰されていましたが、それで何度か表彰された方です。この人の「ごんぎつね」の話を知多大会の時に聞かれた方もいると思いますが、僕たちが跳び箱研究をした時以上に深く取り組まれていました。

長野で新美南吉の本が見つかったというところから出かけていくんですね。新美南吉は長野の出身で、そこに今、記念館とか資料館とか南吉道と道が作ってあって散歩道みたいなものができています。そして、その周りに研究家がいっぱいいるんですが、その人達のところを訪ねて歩いたりとか、原本を見つけてきたりとかされるんです。また、「ごんぎつね」の最初の2～3行文章があるんですけど、あれの元はものすごく長いんです。それがたった1行か2行に推敲されているんです。推敲したのが鈴木三重吉という赤い鳥を発行した人なんですけど、それをなぜこんなにカットしたのかということや、文章の裏側とか背景とか、新美南吉の人柄とか、どうしてこんなものを書いたのかなどを実に丹念に調べられて、そして言葉の一つ一つの持つ意味をすごく吟味され、使っている言葉を自分でいくつにも解釈しながら子どもとの授業にかけていくんです。

「教科内容研究は何か」と質問したら「そんなこと考えたことない」と言われたけど、一つの作品を授業にかけるためにその背景にあるものをすごく丹念に自分の足を使って得ようとしています。そのことが今の私たちに求められているのではないかと。

出原先生が、「今の同志会の成果は1960年代の科学を元にしてつくられた実践で、今はスポーツ科学というのは進んでいるにもかかわらず、そういうものを成果として取り込んでいないのではないかと。教科内容研究がかつてドル平を生みだしてきた時のようにされていないのではないかと」言われました。中村先生とか永井先生とかかつて「ドル平」を創りだしてきた人達があるところ水泳と名のつく文献はかたっぱしから読み合ったそうです。そういう中から「ああでもない、こうで

もない」というふうに本を読んだり、実践を繰り返したりする中で、「呼吸」にたどりついていくわけです。今の同志会はそういうことをしていないのではないかとということから、「何かに1つ決めて教科内容を徹底的に調べ上げてみたらどうか」と言われたのではないかと思います。

## (2)山本典人先生の「消えた日章旗」

次の年、歴教協の山本宣人先生に来ていただいて「消えた日章旗」という授業について話していただきました。今年テレビでも孫基禎のことが放映されたりしましたが、岩波のブックレットでも、「消えた日章旗」というのが出されました。ちょうど去年来てもらった時はまだ、ブックレットが出る前でした。教科内容にかかわらせて先生の話の聞いたのですが、歴史で「日韓併合」を教えるのに伊藤博文の暗殺事件を一生懸命教えていたそうです。ところが、そうするとどうしても、先生が子どもに教える授業になってしまうと言われていました。

この「日韓併合」を教えるのにもっと優れた教材はないかと探していて、これだと思ったのがベルリンオリンピックの時の孫旗禎の事です。孫旗禎は日本の選手として出場し、胸に日の丸をつけて出場したのですが、表彰台で日の丸の方を向きません。韓国の新聞では日章旗を消して載せられます。それが当時の日本の反感をかって新聞社がつぶされてしまうんですが、そのことをもとにしながら日の丸のついている孫基禎と日の丸のついていない孫基禎を見て、どこがどう違うか2枚の写真からわかることというふうに子どもたちに問いかけながら「なぜだろう？」と子どもたちの中に問いを作って調べさせていかれるんです。子どもたちに考えさせながら、迫っていくというふうな形で「日韓併合」を教えるようになったそうです。それで、教師が教えるものではなく子どもたちが調べたり、考えたり、「なぜだろう」と思ったりする授業にすることができたとと言われていました。だから、「日韓併合」ということを教えたいのにそのためにもってくる教材はこれでよいかと考えることは、今の教科内容研究に取り組む体育につながるところもあるのではないかと考えています。

## (3)そして、体育の授業へ

「美しさ」に気づかせるということは「民舞」の方がいいのか、「跳び箱の瞬間芸」の方がいいのか、「マット」の方がいいのかというふうにどの教材を使った時に「美しさ」に気づかせることが教えられるのかというふうに体育でも考えられるのではないかとということです。そんなことで体育に引き寄せて学習できることができました。その後、じゃあ跳び箱でどんな授業をやったらいいのかというところでそのところが新しい授業のイメージとしては、まだ作れないところです。

美しいということに気づく、「わあ！きれい」とか、「すごい」と言った時のそれは何なのかということ今年集めてみようと考えています。去年1年間授業の方を進めなかったのもう一度子どもの方に、授業とか、子どもとか、子どもが、どんなふうに考えているかということに戻りつつ、そのことをもとにさらに教科内容を深めていくというようなことをやっていきたいというのが今年の方針です。うまくいくかわかりませんがとりあえずやり始めています。今、やっているのは保育園、小学校、中学校、高校、大学の先生

に跳び箱の授業をしてもらって何年生の子どもたちはどんなことを考えられて、何年生の子どもにこんなことは無理で、ということを集めることから、跳び箱の持っている価値にもう一度迫りきろうと考えているところです。

これまでは、自分の歩いてきたところを手繰りながら、今の愛知支部の活動を紹介してきました。あと実践の話をしたしたいと思います。

## V.こんな子どもたちとこんな授業を

ちょうど教科内容研究に突入する前の実践で少し前の実践になります。「みんなで考える1年生」とレジメには書きましたが、1990年の時の実践です。そのあとの「夢中になってくれる3年生」は、それより前のもので、「自分たちで活動できる6年生」というのは1991年で、このあたりがちょうど教科内容研究に入る前の「できる」「わかる」「生きる」こととか、「みんなでうまくなる」とかを意識していた時の実践なのでそのことを話してみようと思います。

### 1.みんなで考える1年生

#### (1)衝撃の出会い

この時の1年生は、今まで担任していた1年生の常識をくつがえすような子どもたちなのです。それは、1年生ってこんな子どもたちかなという思いもあるのですが、入学式の時に教室で保護者の方に話をして、その後記念写真を体育館へ行って撮ります。その際、担任が少し遅れて行ったところ、行ったら親同士は立ち話、子どもたちは体育館中走り回って、写真屋さんがカメラを倒されないようにと三脚を押さえているという状況でした。びっくりして子どもたちを集めて一人ずつ椅子にすわらせて写真を撮ろうとするんですが、みんなが写真の方を向かない。それでもなんとか写真の方を注目させて撮ったんですけどこれがやっぱりあっち見て、こっち見て写っていました。これが1年生の入学の時の写真撮影のときの様子です。

#### (2)リレーが成立しない1学期

最初にドンジャンゲームとか遊びとかいっぱい運動場でやっていて「さあ、リレーをやるよ」と言うと、「やったー」と子どもたちから出るんです。そして、4グループになって、最初は2チームでやって見せようとしたところ「ヨーイ、ドン」で走って1位の子が来て、折り返しリレーでタッチをするんですが、タッチをしたらその後どっかへ行ってしまふんです。鉄棒のところやらブランコの所に遊びに行ってしまうんです。今、どっちが勝ったのかも知らない。そういうリレーでリレーにならないこともありました。

そんな子どもたちで、1学期に鉄棒をやってみようとしたのですが、鉄棒にぶら下がるとポトンポトンと落ちてしまふんです。ぶら下がっておれないのです。うんていも今まではできない子の方が少なかったのですが、この子たちのクラスはできる子が2～3人いてあの子は2つ3つ数えたら落ちてしまふんです。これは大変だと思ってとにかく1学期に鉄棒をするのをあきらめて遊具を使ったり、鬼ごっこをしたりして体を動かしたりして体験させるのが大事だなと思いながらやっていました。

給食の時間も今までは、「食べない」とか「これ嫌いだから」とか言っていたのですが、

この子たちは口にポッと入れて、「先生、まずい」と言って、「ほかっていいですか」といいます。今までの子どもたちとずいぶん違うなと思いました。また、「先生、ぼくひらがな書けんよ」と最初から自分に見切りをつけてきます。でも、いっさいは授業を覚えようとはしないんです。

この子は、1学期かかってひらがな 16 個覚えましたが、自分の「かわた」という名前は、保育園などで覚えてきているんですが、「か」だけとりだして「これ、なんて読むの」と言ってもなんて読むのかわからないんです。記号として自分の名前は書いてきたけどいっさいひらがなは読めません。そういう子たちがたくさんいました。

### (3) みんなでてつぼう 2 学期

でも、2 学期になって「みんなで鉄棒」というのをやりました。その中で、グループを作って、てんでバラバラな子どもたちを一つの鉄棒をつかってやることに集中させていくということをねらって、東京の蛭田先生の書かれた実践「お話し鉄棒」というのを参考にしながら授業をやりました。

どんな子たちかというと、

かずき : (鉄棒) 大好き、いろんな鉄棒ができるから、いろんな遊びができるから。

たかひろ : 好き、鉄棒がじょうずになるから。

なおき : 大好き、なんでもできるから。

まさみ : きらい、前まわりしかできないから。

たかまつ : ふつう、さか上がりがもう少しでできそう。

ひろあき : きらい、やれない。

ひとし : きらい、ぼくは、あんまりやってないから。

しん : ふつう、あんまり好きじゃない。

しんすけ : すき、やりたい。

けんじ : ふつう、あしぬきまわりはすきだけどさかあがりがからい。

としえ : きらい、さかあがりできる。

たかまつ : きらい、さかあがりできないから。

たかし : 大好き。

というふうに「好きですか、嫌いですか、それはなぜですか」と聞いたらそんな答えです。やっぱり鉄棒というとさか上がり、跳び箱でいくと開脚とびこしができないから嫌いというのはやっぱり多いです。

嫌いと言っているけど上手にうまくやっていきたいという気持ちもあります。以前の子どもたちが連続技でやっているのをビデオで見せたりしたのに、

「鉄棒、今日学校の視聴覚室で鉄棒のビデオを見ました。それで、一番すごかったのは、宇宙まわりでした。普通だったのはさか上がりでした。一番簡単だったのは足かけまわりでした」とか

「小さい鉄棒ではできるんだけど大きな鉄棒ではできない。上手になりたい」とか「私は、見て上手でした。自分も上手になりたいです」

「私は、さか上がりの連続ができると思いました。さか上がりを練習してもできません。

近くの公園の中に鉄棒があるからさか上がりの練習をしてみます。時々足かけ回りの練習をしています」

というようなことを書いてきました。ビデオを見ながらうまくなりたいという気持ちはあるので、そのことをもとにしながら授業をやっていました。この時にも「わかる」とか「考える」ということを大事にしたいと思いましたので、いろんな問いかけ、最初に好きか嫌いかを聞いて子どもたちの状況をつかんで取り組みました。

鉄棒の授業が終わると「今日の授業はどうだった」と聞いて、絵を書いてもらって、下に文を書いてもらうようにしました。その中には、例えば、自分もできないんですけど「練習してできない子に手をかしてあげる」とか「練習してできるようになったら、手伝ってあげます」とか、そういうところを取り上げて、子どもたち同士の学び合いとか、結びついてくれないかなと思ってやりました。

やっていく中で、小学校の先生たちはわかると思いますが、おなかのところに鉄棒をくっつけてただぶら下がるだけの「おふとんほし」という技ですけど、これで落ちちゃう子がいたんです。上からいったとたんに、手を離してストンと落ちて、考えてみればそんなこともわからないのが1年生だったんですが、そんな失敗を大事にして、「おふとんほし、落ちないようにするにはどうしたらよいですか」とか「こうもりおり（こうもりで足をかけて手をついて降りるんですが）がこわい」と言って片手も離せずにしたのを子どもたちに考えてもらいました。一緒に考えてもらってどうしたらよいかを紙に書いてもらいました。

「おふとんほし落ちないようにするにはどうしたらよいですか」と聞いたら、「落ちないようにしっかり持ってと言う」

「ゆらしたら足を押さえてあげる」

「手をはなさないようにする」

「手をしっかり持つ」

「鉄棒をおなかに入れる」

「できると思ってやる」

「ぶら下がってぶらぶらしないようにする」

「体をきれいにふる」

「ゆれているのが止まってから手をはなす」

というような子どもの考えが出てきました。これを子どもたちの前で読んでやって、また鉄棒をつづけました。すると、

「こうもりおりでもひざのうらにある力をいっぱい出すには鉄棒の低い手の届くところでやる」とか「降りる時には後ろを向かない」とか、いろんな考えが出てきます。こういうものをもとにしながら少しずつ子どもたちが考え、授業ができるようになっていきます。どんなふうに補助をしたらいいのかもだんだんわかってきます。初めのうちは、「痛い、痛い」と言っているのに補助の子が手をはなさないということもあったり、そんなことをしながら少しずつ子どもたちが結びついていきました。

「子どもたちがどんなふうに教えてあげているのか」「何を教えてあげているのか」「何を見ているのか」「何を考えているのか」ということをこっちが知りたかったものですからそのようなことを意図的に取り出していました。のろ君の作文の中からは「手をはなさ



ないでとおしえてあげました」と書いてあったのを教室にもどったときに黒板に書いて「のろ君は、こんなふうに書いてあったよ」とか、くらし君の作文には「ゆきえちゃんのをみてたら地球回りのことが上手でした」と書いてあったのを、「ゆきえちゃんの地球回りが上手だったときちゃんと見ているんだね」と取り上げていきました。また、「ちあきちゃん、できるかなあとおもいました」とか、そんなところを取り出して、「その後も見て下さい」「教えてあげたと書いてあったらどんなふうに教えてあげたのか、そんなことも書いて下さい」と言っていたら、子どもたちもだんだん「」を使って書けるようになりました。

#### (4) うまくなった会話文

2学期の10月から約1ヶ月やったんですけど、冗談半分でいつも良く言うのですが、「何が、一番うまくなったか」というと、「作文がうまくなった」「特に会話文の使い方がうまくなった」という実践なんです。(笑い)

やまさきちかという子が「地球回りを教えてあげた」という題で「今日、わたしは、地球回りを教えてあげた。のろ君は、何回も同じところで落ちるので私は、のろ君にこうやって教えてあげた。のろ君、学校が見えるまでおりちゃいけないよと言った。のろ君はあの後できるようになりました」

いつも地球回りをしている間にひざがずれてきて落ちてしまうのですが、ちょうどグルッと回ってもう少しがまんして反転すると向う側に校舎が見えるんです。校舎が見えるところまではがまんしなさいとこの子はこういう言い方で教えているのです。それで、のろ君はできるようになったんです。先生が言っている言葉よりも子どもの言っている言葉の方が子ども同士やっぱり通じ合うのかなとも思いました。この時は、「考えさせる」とか「わかる」ということを意図してやってきました。

#### (5) ポートサッカー

そのあとに、ポートサッカーに取り組みました。ポートサッカーというのは二重の丸いドーナツ円みたいなものが2つ合って、その間でボールをけりあっていくゲームなんですけど、愛知支部の安藤さんという人が考え出してもう7～8年になります。ずっと2年生担任したらやっているんですけど、それをやってみようと1年生でやったんです。真ん中の子が味方なんです。その真ん中の子にボールをけってうまくボールがいきわたれば1点です。その前に外の円のところに相手のゴールキーパーがいるわけです。普通にポンとけてもゴールキーパーの子が受けてしまいますから、受けてすぐに自分の味方にボールをわたしてしまうので、この子をどう防ぐか、この子にボールをとられないで真ん中の自分の味方にボールがどういくかを考えるゲームです。ドーナツとドーナツの間はそんなに距離はなくてボールを取られたら即攻撃なんです。サッカーでいう中盤の動きがないゲームなんで取ったらすぐ攻撃です。

それで、いつも、うまくなると取られてしまって、初めのうちはまだ意表をついてというか、ゴールキーパーが準備できないうちに得点できているんですけど、そのうちに相手もゴールキーパーに、守るのが強い人をしようと考えて、点が入らなくなります。その時に考えてもらったのですが、「パスをする」とか「守っている人の頭の上を越すように高くける」とか、そんなことまだできはしませんけど出してくれました。

そういうことをいっぱい考えて書いてきてくれるんです。こんなことが1年生でもできるんですね。作戦をたてるというか。ポートサッカーの実践を体育科教育に載せたやつにあるのですが、あまのたかひろ君という子が、「ポートサッカー きょう学校でポートサッカーをやりました。はじめにうんどうじょうにでてきてグループでどういうさくせんをたてるかかんがえました。ぼくだけがかんがえて、よしえちゃんとかずきくとけんじくとちあきちゃんとまいちゃんはさくせんをかんがえていませんでした」

他のチームでもあきちゃんという子が、作戦を考えて、みんなに言うわけです。でも「赤は攻撃」とピーッと笛がなったらみんな覚えていないんです。あきちゃんだけ覚えていて「みんなだれもおぼえていないのでなにもしてくれませんでした」と怒った作文も出てきました。

「ぼくたちが、いちばんにおわりました。ぜんぜんならばないかられんしゅうができなかった。だから先生はおこっていました。こわいかおをしておこっていました。それからぼくが「ゼッケンは」といいました。それから先生が「そこにある」といいました。ぼくは、「なんだ」といいました。それからゲームをやりました。はじめに4はんとやりました。はやしくんは、ぼくたちのほうへパスしました。ぼくは、「みかたのほうへパスだ」といいました。ぼくが、さわきくんのところへてんすうがはいらないようにととめました。でも1たい0でかったからよかったです。つぎは5はんとやりました。なんで5はんとやると0たい0なんだとかんがえました。また、5はんとやりました。よういができて先生がふえをふいたら「かずきあっちいけ」といいました」

「かずきあっちいけ」というプレイが1年生でもできるんです。1年生でもここまではできるなと思ったんですけど、こういうことをいっぱい集めていくことが大事なんじゃないかと思いました。

## 2.自分たちで活動できる6年生

### (1)水泳 ペア学習

そういうことがあって、次が6年生だったんです。6年生になって、最初に子どもの様子をつかむということなんですけど、6年生ぐらいでしたら文章が書けますので、「こんなふうにするよ」の最初の時からしました。

ペアを組んだ大西さんと田中さんの、授業が始まる前に書いてもらった作文です。

大西聡子さんは、

「母さん、プールだして」と言って庭に出ると、外には小さなプールがあった。私は、保育園のころからプールが好きでした。いつもひまな日には庭で水かけなどしていました。おふろなどで、大きなおけに水を入れて遊んだりもしました。「おふろに入るよ」と言うといつも、「はあ〜い」と笑っておふろにはいっていました。あまりにもはしゃぎすぎておふろでこけてぬったこともありました。

私は、プールは行ったことがなくて「一度行きたい」と願っていました。初めてプールに行った時大プールは川のようにこわかった。お父さんの手をにぎって大プールに入りました。

よくプールに行くようになり、プールになれてきました。おにいちゃんたちの泳いでいるのを見て少しずつふちっこで練習しました。おにいちゃんがプールでおぼれたときは少

しプールがこわかったです。中プールで「足をよくふって」とお父さんに声をかけられながらも、がんばって練習しました。お父さんに、「スイミングを習いなさい」と言われた時はうれしかったです。でも、そのころのプールはすごく大きいのでこわくて「行きたくない」と言って大声でないたこともありました。あまりにもいやだったのでプールはやめてしまいました。

でも、そのこうかがあったのか泳ぐのが少しずつうまくなってきました。学校では 25m 泳げなければ、かいていしどうに出ると聞いたのでいっしょうけんめい練習して 25m 泳げるようになりました。おにいちゃんは、もっとうまいのでまた教えてもらって練習しました。でも、練習したからもうだいじょうぶと思いき学校でやるとうまく泳げませんでした。学校の自由時間の時も遊びながらも練習した。きれいに泳げるようになってきた時は、うれしくて家に帰ってから「泳げるようになったよ」とおかあさんに言った。お母さんは、「よかったね」と言ってくれた。わたしは、目標を作ったから泳げるようになったような気がした。だから、次の目標は 50m にした。やっぱり 50m は息が苦しくなるのでつらかった。5年生になり 50m は平泳ぎで泳げるようになりました。今度は、100m 泳げるようになりたいです。

これが教える前です。大西聡子さんは、50m 泳げて、次は 100m を目標にしている小さいころから水に親しんできています。つぎは、ペアの田中昌子さんです。

うちの家族は、みんなお母さんもお父さんもおねえちゃんも泳ぐのが苦手なので小さいころぜんぜんプールに行ったりしなかった。そのせいだけじゃないけどみごとに私もプールがきらいだった。小学校に入っても全く泳げなくて4年かいかいていしどうに出た。4年の時は、かいていしどうに出ても全く効果はなかった。5年になっても全く泳げなくて5年の時かいていしどうに出た。武内先生にしどうしてもらっていっしょうけんめい練習した。やっぱり 25m まではとどかなかったけど 21m まではなんとかいった。武内先生が、「なんであと 4 m だったのに。立っちゃったの。おいしいね」と言った。私は、なんで立っちゃったんだろうと思った。その日は、もうかいていしどうが最後の日だったので武内先生に「来年は、すいていしどうを受けないようにね」と言われた。おねえちゃんは、「小さいころスイミングでも習わせてくれてたら水泳ばっちりだったかもしれないのに～」とよく言っている。私も今年こそは 25m 泳ぎたい。

これでスタートして、大西さんと田中さんのペアでドル平から入っていったんですけれどもその時の7月の夏休みにはいる前に書いてもらったのがつぎの作文です。

大西さんは、

「大西さん、田中さん」といって私のペアがきまった。私のペアは、昌子ちゃんです。昌子ちゃんは、私より少し級が下なので教えてあげます。泳いでいる時耳の中に水が入るのでアドバイスしてくれている昌子ちゃんの言葉が聞こえません。初めて水から出て自分の手が最後までかけていないなあということを昌子ちゃんに教えてもらいました。

昌子ちゃんも、25m 泳いだ時、「よかったね」と声をかけずにいられなかった。ドル平は、6年生になって初めて教えてもらいました。やはり、初めは 25m 泳いで息がつまりハアハアしていました。力を入れていたせいか、手なども全体がつかれていました。昌子ちゃんが泳いでいる時、力が入っているなと思いました。だから、25m など泳ぐとつかれたり、苦しくなったりするってわかりました。ドル平は、呼吸を続けるといいとわかって自

由の時でも少しずつ呼吸の練習をしていました。100m はやっぱり苦しいです。いざ、「100m 泳ぎなさい」なんて言われても、泳ぐには私にとって一苦勞でした。泳ぎだしてやっところさで 100m 泳ぎました。私なんて息がつまり、くるしくって後は、何もやりたくなくなっただけ、他の子は息が切れていないので、なんでだろうとおもいました。100m も楽に泳げるようになった時ふと気づいた。ゆっくりと力を入れなくて楽に泳げばということに気がつきました。

ドル平の次は、ドルバタでした。1 度お父さんに教えてもらったことがあるけど、あまりうまくいきませんでした。初め、水の中から手がぜんぜん出ませんでした。出たとしてもひじからでなくて全体が出てしまいました。ドルバタは、力を抜いて泳ぐのには苦しくて苦勞しました。

手を出してはやらなかったけど背泳ぎは自由時間などでも遊びながら練習していました。

とびこみは、昔からやったことがあったけど久しぶりにやったので、腹打ちしたりしてうまくいきませんでした。

クロールは、大好きです。でも力を入れてやってしまいます。楽に泳げるように少しずつ練習しました。

平泳ぎは、みんなうまかったです。でも、私は、左足があおり足だそうです。だから、うまく進みません。

もうすぐ最後です。タイムを測り級を決める時でした。私は、タイムはめったにはからないので、うきうきしていました。先生が「とびこみ」って言った時は「えー」と思ったけれど、やはり級なのでがんばってやろうと思ってやりました。先生が、「よいい」と言って私たちが台に立った時すごくきんちょうした。「でも・・・」と思っていたら、「どん」と言った。言ったと思い、水にとびこんだ。クロールは 20 秒で特 2 でした。

後は、平泳ぎです。息をひきしめて台に立った。その時、あまりにも前の方にいたせか前へ落ちていった。「どん」と声がかかり私は、おくれて特 2 はすべってしまいました。私は、あまりにもきんちょうしていたからどじをしたと思い、その苦しく、くやしい気持ちが残っています。今度の夏休みプールへきて特 2 を受けてうかりたいです。

田中さんは、

今年もプールが始まって、最初のへんは、ドル平の練習だった。ドル平を初めてやった時は全く力が抜けなくて「泳ぎにくいなあ」と思っていた。でも、どんどん練習していくうちにやるたびに楽になってきた。初めてドル平で 25m いったときはとてもうれしかった。

それからクロールや平泳ぎで 25m いったときもすっごくうれしかった。クロールはバタ足をやっていると足がものすごくつかれたけどクロールもやるたびに楽になってきた。ペアのさとちゃんに手のかきがどうだのと注意してもらってだんだん楽になってきた。息つぎの回数も前よりはへったと思うし、前と比べるとずいぶんよくなったと思う。でも、まだドル平の中にバタ足が入ってしまったたり、平泳ぎでも足などがいいようにできないので夏休みのプールなどでもっと練習したいと思う。

あとは、とびこみなどももっとうまくなって今度は 50m を目標にしたい。それからペアのさとちゃんは、最初からとてもじょうずだったけどもうあおり足もだいぶ直っているしさとちゃんも前よりももっとうまくなったと思う。

今度は、50m を目標にしてがんばろう！

田中さんは、25m 以上泳げるようになったんですけれども、その時の様子とかだいたいそんなパターンで授業を進めていくようになりました。

この実践は夏ですので、その年に秋から冬にかけて跳び箱の授業をやりました。

## (2)跳び箱 コンセプトマップ

学校教育という広島の付属小の雑誌の 11 月号のところに中村敏雄先生が、走り高跳びの絵が書いてあってそこにいろいろ書き込んであるのを例に出されて「コンセプトマップ」というような言い方で書いておられました。「あっ、これなら自分もやっている」と思い、もう一人、服部先生という付属小の先生がドル平で書き込みをやっているということで、それが同じ号に載っていたものですから自分もこんなことをやっているということで書きました。

最近の僕のやり方ですけど、書く・分析力をつけるということをネックスプリングを教える際に、舞台の上から前転しておりるときのことを使ってそれをやるために、ひざを伸ばそうとして、ひざが伸びていたかどうかをチェックしていたら、みんなできたできたと言っているんです。でも、見ているとできない子が半分ぐらいいるんです。それをみんなできたできたと言っている。それぞれの欠点が見えていないんです。どこを見たらいいのかわからせたいと思って、終わった後に授業の終わり際にとったビデオを教室で見ながら書き込みをしていきました。

それを毎時間並べてみるとおもしろいですね。1 時間目から 6 時間目、何時間目、何時間目と最初の方から書いたものを並べていくと変わってくるのが良くわかります。そのうちに子どもたちが飽きてきて、だんだん顔を工夫したりして変なことをやって遊び始めます。でも、最初と最後ではずいぶん変わってきます。1 回目と 2 回目では、そんなに変化は見られないけど、どこを見たらいいか、書きながらわかっていくことができるのではないかと思います。

小野木さん、何をやるのも人の 2 倍ぐらい時間がかかって、3 段の台上前転ができなかった子ですが、この子も最後は、5、6 段の台上前転ができたけど、ネックスプリングまではいきませんでした。この子にとっては跳び箱は恐怖で、書き込みには人間に対してとっても大きく跳び箱が書いてあって、この子にとっては跳び箱がこんなにも大きく見えたのだということがわかりました。さて、ネックスプリングに移るのですが、「ネックスプリングはきらいだ。うまくできん」と言います。「何で、うまくできんのかな」と感想文を見たら、「ネックは走ってその次に踏切板を踏んで、その次に手をついて頭をつく。ヘッドは走ってその次に頭をついて手をついて、・・・」と書いていました。この子は「ヘッドは頭を先につく」というふうに、「頭から激突していく」と思っていたのでこわくてしかたがない、痛くてしょうがないと思っていたのです。だから、「嫌い、やりたくない、うまくいかない」というふうに言っていたんです。こんなこともあって、「書く」ということはこういうことを見つけることにもなったりするのかなとも思っています。

## VI.我々が、やっていくこと

### 1.教科内容研究

去年1年間教科内容研究ということで「戦略・戦術」とか「うまくなること」とかそういう出原先生が教育課程試案で挙げた言葉を学習会で少しずつ勉強していきながら、それは果たして教科内容かどうかということをやってきました。そういう中で時々中村先生がお手紙を下さるんですけど「まあ、小学校レベルでいくと技術の分析、総合みたいなことや、ルール作りということが中心になるんじゃないの」と言われたんです。もちろんポートサッカーに見られるように初歩的ではあるけれど「かずきあっちいけ」というふうな「指示が出せたり」、「パスをする」とか「作戦を自分たちで考えている」とかの一番の根にあるものは低学年でも育てられるのではないかと考えています。また、そういうことを知っていることが5、6年になった時に戦略や戦術を学ぶ時につながってくるのではないかとまだ漠然としたものですが考えています。

一番最初に「生きる力」をつけるにはどう子どもを励ましていくかというふうに言ったんですけど「できる」とか「わかる」を保障して取り組まなければならないと言いました。そういう学習の体制ができていくかどうかということが以前、出原先生も言われた「よい授業はよい学校から生まれる」ということだろうと思うんです。

逆に言うと授業をやっているとこんな不都合に出くわします。今年4月に学校を変えました。変わった途端に3時間の授業のうち1時間は学年合同体育でやることになり、行進の練習をしたり、「ラジオ体操をやりなさい」というカリキュラムだったのですが、これは説得をしてそれぞれのクラスでやらせてほしいというふうにしました。他にもそのようなたぐいのもので、例えば水泳は能力別に教えなさいというようなカリキュラムが組まれていたんですが、そういうことに対しての改善も一つずつ学校を作っていく主体者としてやっていかないと子どもを励ます体制というのはできていかないとします。自分が一生懸命がんばってもまたどこかにつぶされていくというふうでは効果があがりませんので、こんなことが実践につながっていくのではないかなと思っています。

## 2.めあて学習を乗り越える

それから、今年の愛知支部の方針の中にもありますけど、新学力観をどう乗り越えるかということと子どもの権利条約の主旨をどう授業に生かすということはどういうことかを考えて授業をやっていきたいと思っています。

先日研究指定校の授業を見にいきました。マットの授業を見て、めあて1ではグループ学習をやるけれども、めあて2では課題別にそれぞれ別れて、開脚の前転をやっているグループはずっとそればかりやっているし、片方では、側転をしたりセーフティマットのところでしたいことをしたりしてやっているんですけど、ばらばらにバックミュージックが流れている中、一体先生は何を教えているんだろう、子どもたちは何を学ぶんだろうというふうに大いに疑問が起こるものでした。それをこちらがきちんと意図を持って授業を仕組んで、子どもたちにこういう力をつけたいとねらいを持ってやっていかないとますます子どもたちの格差は開いていくのではないかなと思っています。そういうことはことあるごとに問題にしていかななくてはいけないと思いました。

去年の大阪の体育学会に行った時に学会のレベルでは「めあて学習」は批判的の的にさらされて破綻しているにもかかわらず、愛知では伝達講習というと「めあて学習」です。相変わらず指導主事はめあて1、めあて2というふうな技術を教えること、いや、そう教える

のでなく支援をしなさいとか、見ててチェックをしなさいとか、観察しなさいとかいうことを相変わらず話題にしており、今でも広がっています。

いわゆる「汗かき体育」とか「息抜き体育」をやっている学校では「めあて学習」が入ってくることで、その指定の先生に聞いてみると子どもたちが前よりもうまくなった、今までは体育の時間は遊びだったのに・・・とまがりなりにもやれているわけです。ヒントカードとか支援のためのテキストを使ったり、「やりたいことは、あれを見てやりなさい」とやるもんですから、結局目的を持たされてやることもあり、うまくなったといわれるんです。だけど、その中で育っていく子どもは一体どういう子ども観やグループ観、能力観を形成しているのかというところまで思いはいかない。そういうところは、やっぱり僕たちの実践で乗り越えていかなければと思っています。